
千の刃と千の銃弾

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の刃と千の銃弾

【NZコード】

N1611Z

【作者名】

ちゃんこつ

【あらすじ】

平和な日の突然の終わり。

神は人間を殺し、ゾンビとして自分の奴隸として扱おうとする。

そんな、神を殺す人間たちの下剋上。

(注意) 主人公と敵主人公はチート並みの強さです。

主人公、ヒロイン、敵主人公、敵ヒロインの視点を変えながら書いていきますのでご了承ください。m(——)m^v

刃と魔界（前書き）

今回は、千歳大樹視点です

刃と魔界

【魔界】

一ヶ月前までは平和だった・・・
魔法使いが攻撃魔法を使うような日はなかつた・・・
人が魔物を切るような日なんてなかつた・・・
銃使いが、人を撃つことはなかつた・・・
なのに・・・

ある日・・・平和な日常は一瞬して、無くなつた・・・
神が舞い降り、人を殺す・・・
そして、殺して使える奴はゾンビとして使う・・・
地獄だ

そして、人間が神を殺す時代 神が人間を殺す時代が始まった
俺、千歳 大樹も学生ながら戦っている
「はあはあ、こっちには誰もいなかつたよ」
「そうか」

背が低く金髪でショートカットで目が赤色の女の子
こいつの名は、柊 真奈

俺の幼馴染だ

俺達はこの魔界から脱出するため旅をしている
「じゃあ、ここには用はないな、出るぞ」
「ちょっと、待つて・・・」
息を切らしている

そんなに遠くまで見てこなくていいのに・・・
「わかった、休憩だ。ゆっくり休め」
「う、ごめん」

俺達はまだ人間だ
ゾンビにはなつていない・・・
後、どれだけ俺達が生き残れるだろう・・・

この魔界で・・・

巫女と帰つ道（前書き）

今回はひこらめな
柊真奈視点です

巫女と帰り道

(やつぱり、やさしいな大君は……)
こんなわけのわからない土地……

本来の私ならもう気がくるつていてると思つ……
でも、大君が氣を使つてくれる

うれしいな……

でも、あの時は最悪だつた
いつも一緒に帰つて……

その日、自分の思いを告げよつと思つたのに……

【帰り道、過去】

「今日のテスト、どうだつた?」

「とりあえず、俺は魔法使いになれないことがわかつた……」

「はは……やつぱり武器の召喚しかできないんだ……」

大君は、魔力こそは高いはずけどなぜか武器の召喚しかできない……

「仕方ないだろ? 俺はもともと素質がなかつたんだよ」

「そりかなあ、武器の召喚1000種類以上出せる時点ですごいよ
うな気がするけど」

「そう言つ真奈は?」

「え!? ……私は、いつも通りだつたよ」

「はあ、やつぱり……」

自分で言つのもなんだけど、攻撃魔法以外なら使える……

やつぱりこれは血筋かな、巫女だし

「とりあえず、俺は今日のことを忘れる……」

「一週間もしない内にテストの結果帰つてくるよ?」

「だああああ!! なんで、テストの内容が3通りの魔法を見せらる
んだよ!! 俺は一つしかできねえよ……」

「まあまあ、叫んでも近所迷惑にしかならないよ?」

「・・・別にいいと思つてゐる」

「う～ん、じゃあ今度遊びにいかない？どつか」

「お、いいな。て言つか真奈から誘つてくれるのつていつ以来だ？」

「細かいことは気にしない」

「そうだな、つでどこ行く？」

「どのタイミングで告白しようかな？」

「帰り道の別れ際？今ここで？」

「う～ん迷っちゃうな・・・」

「・・・真奈、あれなんだと思つ？」

「え？」

大君が前の方に指を刺している・・・

そこには、ドラゴンがいた・・・

刃とドラゴン

「・・・人間、殺す」

「な!?」

ドラゴンははつきりと言った
やばい・・・

真奈を守りながら戦えるか?

「な、なんでこんなところに・・・ドラゴンが・・・
まずは女!・・・すうひひひ」

溜めた!?

・・・待てよ教科書通りなら・・・

「真奈!火耐性の補助魔法を使え!」

真奈「え?え!?」

パニックになつていてる・・・

そうだ、この状態の真奈は魔法を詠唱しても・・・

「フレイブ・・・ううううう!」

100%舌を噛む!!

「くそ!..」

俺は手元に武器を召喚した

武器の召喚魔法は詠唱はいらない・・・

選んだ武器は・・・

冷刀吹雪

この刀は自分の魔力を注入すると、吹雪が起こる

「間に合え!..」

「ガアア!..」

炎をブレスが迫つてくる・・・

だが、間に合つた

「ツチ!、やるな、学生のくせに・・・

「なんで、俺達を殺そうとする!..」

「お前達だけじゃない・・・人間すべて殺す・・・要は戦争だ」

「ドラゴン対人間でか? 勝てると思っているのか?」

「いいや、ドラゴン、モンスター連合と神様対人間だ」

「は? 頭くるつてんのか? 神が人間を殺すわけ」

「あるんですよ・・・」

「!誰だ!?」

ドラゴンの足元から黒髪の長い女性が現れた・・・

服装は、絵画に書かれている天女の服装・・・

「私の名は、神宮皇月かみや さつき・・・女神の命令で人間を殺しに来ました」

「・・・」

(やばいな・・・神と戦うのはどうでもいい、今それより重要なことは)

「・・・どうした? 顔色悪いぞ?」

神・・・皐月の後ろに銃を持って男が立っている・・・

銀髪のショートカットで、マントをもう片方の手で持っている

その男は、ドラゴン、神、なんかよりもすごい魔力を持っている。

・

魔力は誰でも感じることができる・・・

だけど、それを感じるのは同じくらいの魔力だけ・・・

俺は他の魔法を使えないが、魔力は多い

だから、ほかのやつらには俺の魔力を感じることさえできない・・・

だが・・・

神、皐月の後ろに立っている奴は俺と同じくらいの魔力を持つている・・・

こんなこと初めてだ・・・

逃げないとやばい・・・

3対2で分も悪い・・・

逃げないといけない・・・

だが・・・

「はあ、さつさと終わらせるぞ?」

パアン！！キン！！

撃つてきた弾を刀ではじいた

はやい・・・今まで見たなによりも

「お！勘違いじゃないか・・・やつぱりお前魔力高かつたのか」

「・・・てめえも、十分高いだろ・・・」

「まあな、さて・・・お前の実力が知りたくなつてきたな・・・」

「・・・名前は？」

「神宮亮・・・元大学生のゾンビだ」

「千歳大樹・・・高校生」

ゾンビか・・・なぜか知りたいが、そんな場合じゃない・・・

「ちょっと、亮。殺さないといけないんだけど」

「わかつてるつて、皐月そのためにこいつの実力を試すだけだから」

パアン！！パアン！！

俺に向かつてきでない・・・

狙いは・・・真奈！！

巫女と力の差（前書き）

今回は、ひいらぎな終真奈視点です

巫女と力の差

大君が私より強くて魔力が高いことは知っていた・・・
だけど、その力と同じぐらいの人がいるなんて思いもしなかつた

キイン、キイン！！

大君は刀で、相手の銃弾を防ぎながら私の盾となつている
「真奈！！立てるな？」

「う、うん」

「とにかく、ここから逃げるぞーー！」

「わ、わかつた」

私たちは走つて逃げようとしたが・・・

一瞬のうちに・・・

ドラゴンは後ろに・・・

「逃げれると思うか？」

神は、私たちの横側に・・・

「逃がしはしません」

そして・・・大君と同じぐらいの魔力を持つ相手は・・・正面から・

・
「おいおい、逃げるなよ」

ゆっくりと・・・歩いてきている・・・

大ピンチ・・・

私の頭の中でそんな言葉が浮かんだ

そして、もう一つ・・・

お荷物・・・

そう、私は今大君のお荷物、邪魔なだけだ・・・

「クソ！！」

大君は新たに武器を取り出した

盾だ・・・

私が知つてゐる限りじゃ 大君は盾を使わない・・・

攻撃だけで防ぎきれるから・・・

だけど、今は・・・

「ガアア！――！」

ドラゴンのブレス・・・

「フレイムランス！――！」

攻撃魔法・・・

「さて、防ぎきれるか？」

銃弾・・・

私がいるだけで、この攻撃をすべてとはいわないかも知れないけど、
避けれない・・・

多分、私はどれか一つでも当たれば死ぬと思う
「真奈！俺がおとりになる、その間に逃げる」

「え・・・」

おとり・・・？

何言つてるの？大君・・・

それを言つなら・・逆じやないの？私の方が弱いから・・・

お荷物つて自覚はあつた・・・

けど、今は離れたくなかった・・・

今、離れたらもう会えないような気がしたから・・・

「いや――！」

「真奈！――」

私に対して怒つている・・・

それも、そう・・・

私のわがまま大君のお荷物になつてゐるから

巫女と力の差（後書き）

感想で、セリフ前に名前があるのは読みにくく」と思いましたと言われたので、ためしに作ってみました！！￥（ 〇 ）＼
できれば、前のと比べてみてどちらが読みやすいか感想してください
いゝm（—）m＼
こちらのほうが読みやすかつたら前のやつをすべてセリフ前に名前なしに書き直すつもりです！！＼（^○^）＼

銃弾と次元転送魔法弾（前書き）

今回は、**神宮亮**かみやりょう視点です
あと、セリフ前に名前は付けないとしました（^__^）

銃弾と次元転送魔法弾

(うまく行けよ！！)

ドラゴンと皐月の攻撃が大樹盾に当たった
それに続くように俺も撃つた
だけど俺は弾をえていた・・・

次元転送魔法弾・・・

当たれば、どこか別の場所に行く便利な弾だ・・・
どこに行くかわからないのが不便だが、あいつなら大樹ならたぶん
大丈夫だろ・・・

そして、俺は撃つた

盾を構えて女の子を守ろうとする大樹を・・・
ラツキーなことに女の子は今、大樹にしがみついている・・・
あのままなら一緒に次元転送してくれる

パン

「うー？なんだ・・・」
「きやあああああああ！――！」

黒い渦が大樹と女の子を包み込み移動した・・・
その光景はドラゴンと真奈の攻撃で真奈たちには見えていない・・・
(まずは、最初の課題クリアっと・・・)

俺は心の中でそう思つた・・・

「逃げられた？なんで・・・」

「まあ、あつちも強いつてことだな・・・」

「ふざけるな！！俺はまだ戦いたいんだぞ！！」

ドラゴンが鼻息をあらあらしくしていった

・・・こいつは邪魔だな・・・

「お前は、邪魔だ・・・」

パン

「ぐあああーーー！」

ドランゴンが倒れた・・・

皐月はそれをぼつと見ている・・・

皐月は眞面目な性格だ・・・

そして、恩は絶対に忘れない・・・

そのせいで、いまだに騙されている・・・

あの、悪魔のような神に・・・

神と女神の命令

私は死んだ、亮が病死して間もなく・・・
だけど、今は神様の・・・女神様のおかげで私たちは生きている・・・
・ゾンビとして
別にどんな姿でもいい・・・
亮と一緒にいたい・・・
永遠に・・・
それが、私の・・・私たちの願い・・・
「亮！何してるの？」
亮がドラゴンを撃つた・・・
そのドラゴンは死んだ、確実に
亮の魔力は底知れないほど多い・・・
もしかしたら、神よりも・・・
いや、亮は神以上の力を持つている・・・
今の私は神だ・・・下級の神だが、だけど亮はわたしより強い・・・
なんで私が神に選ばれ、亮が神に選ばれなかつたのか・・・
その理由がわからない・・・
どうしてだろう・・・
でも、私たちがまた一緒にいれる
だから、私は神様に感謝している
「まあ、俺にも考えがあるんだよ」「
・・・できるかぎり殺さないでね？」
「わかつてると・・・お前が殺しが苦手なことぐらい」
そう、私は殺しは苦手だ・・・
いや、血を見るのも嫌だ・・・
でも、これもすべて・・・
女神の命令だから・・・

刃と食糧（前書き）

今回は、千歳大樹視点です

「さて、そろそろ行くぞ?」

十分な休憩はとった

そろそろいいか、と思つたあたりで真奈に声をかけた

そしたら・・・

「すうすう・・・」

（たく・・・俺に寄りかかってきたと思つたら寝てやがる・・・人の氣もしらないで・・・）

はつきり言つて俺は真奈のことが好きだ

こいつのためなら命をも投げ出すくらいの覚悟はある

だけど、もしこいつが・・・俺が真奈に告白して嫌いになられたら・

・

そつ思つと怖い・・・

今までいい・・・

だが、いつまでもこの今までいい訳がない

「はあ、どうしようかな・・・」これから・・・

俺も知らない魔界・・・

どんな強力なやつが出てくるかわからぬ

上には上がる・・・一か月前の亮のよう・・・

いつまで・・・守りながら戦えるだろう・・・

非常食もあとわずか・・・

もう、真奈の持つているチョコレートぐらいだ

今日中に、食料の確保をしないとやばい

巫女と夢（前書き）

今回は、
柊 真奈
ひいらぎ まな
視点です

「う・・うん」

「起きたか、真奈」

私はいつの間にか大君に寄りかかって寝ていた
夢を見ていた・・・

そこは、大君と一緒に幸せな生活を送っている夢・・・

なんでだろう・・・

少し前までは、現実味があつたのに・・・

今はないとthoughtた・・・

「ねえ、行かないといけない?」

「食料がそろそろ見つけねえといけないからな・・・

「そ、そうだつたね・・・」

「どうした? 急に?」

「ちょっと、不安になつて・・・」

「大丈夫だつていつだつて守つてやるよ」

大君は一か月間魔物と戦つた・・・

全部私は補助魔法と回復魔法しか使つていない・・・

攻撃魔法は邪魔だからだ・・・

それに対しても、大君はずつと前線で戦つてている・・・

多分そろそろ、精神的にはきついはずだ・・・なのに・・・

そんな状態なのに・・・

ずっと励ましてくれる・・・

「お、ここに人間がいるってめずらしいな・・・」

「! !」

「え! ?」

「さて、神様のために死んでもうつぞ」

刃と竜巻（前書き）

今日は千歳大樹視点です

「召喚魔法・・・ケルベロス！！」

相手は、召喚魔法を使った

オオカミみたいなのが召喚されている

めんどうだな

「真奈！ちょっと離れてろ！！」

「う、うん」

（ツチ！人間じゃねえなこいつ・・・神のためか・・・なら！）

俺は手元に刀・・・風斬かぜぎりを召喚した

この武器は比較的に軽い・・・

しかも、使用者の魔力によつて振つた時に竜巻が起つたりする
俺の場合絶対に竜巻が起つる！――

「おつら――！」

ブン――！

竜巻が3個ほど出た

「な！」

「アオ――ン――！」

命中だ

「うああああ――！」

ケルベロスは消え、残つたのは男だけ・・・

「おい、ちょっと聞きたいんだが・・・」

「ツヒ――！」

「案内してくれないか？魔界の出口まで・・・」

「それは・・・」

さつき、神ためつて言つた

人が言う可能性は少ない、ならこいつはゾンビだ

「ゾンビの殺し方は知らねえけど・・・首切つたら多分動けなくは
なるよな？」

「わ、わかった！！出口は知らねえけど、出口見てえな場所なら知つてゐ！」

「どこだ」

「ここの道をまつすぐ行つたぐらいに村がある・・・多分そこから出ることができる」

「他には？」

「し、知らねえ」

「そりか・・・」

俺は武器を消した・・・

「さつやどどっか行け！！俺の気が変わらない内にな・・・」

「は、はい！！」

男は走つて逃げて行つた・・・

・・・嘘だろ？・・・

・・・倒しはしたけど、竜巻の威力は殺せるぐらゐはあつたはず・・・

・・・なのに、あいつは無傷・・・どんだけ、ゾンビ強いんだよ・・・

「大君？大丈夫？」

「ああ、脱出できる場所が分かつたから行こつぜ」

「ちょっと、準備をして・・・」

銃弾と発見（前書き）

今回は神宮亮視点です

（ふう、やつと見つけた・・・）
遠くの方で、大樹と近くにいた女の子が見える・・・
「どうかした？ 亮？」
「いや、すごい風だつたなあと思つてな・・・」
「確かにすごいかったわね・・・」
「ついさつき、突風が吹いた・・・」
魔界ではそんなことが起きることはない
なら、誰かが起こした
近くにいればわかるが、近くにはいない
よほど強いやつしか無理だ
だけど、そんな強いやつゾンビの中にはいなかつた
なら、人間だ・・・そして、心当たりもある・・・
だから、俺はその方向を見た
いた
思わずやけてしまつた
ここ一か月噂さえも聞かたなかつたから、俺の見込み違いだとおも
つたが
一番生存率が低い、ここで生き残つていたとは
「皐月、ちょっと行きたいとこあるんだが・・・」
「黙目よ、これから女神と会うんだから」
「・・・まあ、いつか。一つ聞くけど、まだ感謝してるのか？ あの
女神に・・・」
「そうよ、だつて死んだ私達を生き返らせててくれたのよ？」
「その代り、いいように使われてないか？」
「仕方ないじゃない、それぐらいだつたらいいわ・・・」
「それぐらいねえ・・・」
絶対無理している・・・そんなことぐらいはわかる

だけれど、今の俺では「こいつを助ける」ことができない

銃弾と発見（後書き）

もしかしたら、これからモンハンに時間を取られて更新が遅れたりするかもしれません、頑張って書き続けたいと思います

巫女と魔力の量（前書き）

今回は
柊真奈
ひいらぎな
視点です

巫女と魔力の量

「・・・おなかすいたね・・・」

「ああ・・・て言つたかお前はチヨ「残つてなかつたか?」

「大君が食べないのに私だけ食べるなんてできないでしょ」

「別に俺は動けるからいいがお前は結構やばいんじゃないかな?」

う・・的を得ている

魔法には体力を使う

私たちは魔法使いでも・・・魔力の量が違う

私が回復魔法を使うのと、大君が武器を召喚するので魔力の量がある

それだけ、差がある

だから、大君は基本的には自分はあんまり食べてない

こういう時は、実感させられる

私は足手まといなんだなあと

「お、村が見えてきたぞ」

「え!?」

私は大君の視線の先を見た

確かに村がある

だけど・・・

「全員人間とはちょっと違うな・・・」

「うん」

尻尾が生えていたり、角が生えたりしている

人間に限りなく近いけど、ちょっと魔物が混じつている

「とにかく、行つてみるか・・・あの数なら逃げるくらいなら何とかなるだろう・・・」

・・・ざつと見渡した限りで10個ほど家がある・・・

多分、50人ぐらいだろうな

なのに、大君は何とかなるつて言つた

そこまで、強いんだ

私は魔力の差がありすぎて、大君の魔力の量を図ることができない

「じゃあ、行こうか・・・」

「そうだね」

刃と村（前書き）

今日は千歳大樹視点です

【村】

さて、一応すぐに戦えるようにならう……

「あ……」

「人間？本物の？」

俺達は堂々と村に入った

・・・何かがおかしい・・・

みんな元気がない？

「あのう・・・」

「うん？なにかなあ？」

真奈が聞き返す

「人間？お姉ちゃん」

「そうだよ」

周りが騒ぎだした・・・

やばいか？

て言つた、真奈正直すぎ・・・

「本当に人間なんですね・・・」

「あ・・ああ」

「よかつたあ!!!!じゃあ、神様は私たちのこと聞いてくれたんだ

ね!!」

「神様？」

戦争じゃないのか？

俺達人間と神様、魔物たちの・・・

「どういうことです？」

「私たちは見ての通り、ちょっと魔物です・・・いうゆる落ちこぼ

れ

「だから、見放された。そして、神に願いました・・・」

「人間にしてくださいと・・・」

「！！」

俺と真奈は驚いた

人間にしてください・・・

もし、神にそれが届いたなら完全なる神への宣戦布告・・・

もしかして、やばいんじゃないのか・・・

この村！！

神と女神（前書き）

今回は、神宮^{かみや}皐月^{さつき}視点です

神と女神

【女神の宮殿】

「よく、きましたね・・・」

「お久しぶりです！！女神様！！」

女神・・・私たちを生き返らせてくれた神だ
中でも、上級でほかの神の従えている

私もその一人だ

「・・・」

亮が睨みつける

「亮、あいさつ・・・」

「別にいいです、亮はよく戦つてこることを知っていますので・・・」

「俺を名前で呼ぶんじゃない、苗字で呼べ」

「ならば、神宮でいいでしようか？」

「あの・・・それだと、私もなんですけど・・・」

「・・・まあ、あなたは臯月と呼ぶので・・・」

「そう言えば、私たちが呼ばれた理由はなんなんでしょうか？」

そう、私たちは人間の殲滅を行つていたんだけど急に呼び戻された
「実は、この辺に村がありました・・・そこを滅ぼしてきて欲しい
いのです」

「・・・來た・・・」

殺しの命令

本心ではいやだ・・・でも

「わかりました・・・でも、私達だけでしうつか？」

「一応、魔物たちは集めていますのでその指揮をお願いします
「数は？」

亮が訪ねる

「こちらは、1000・・・あちらは500いるかいなかでしう

ね

！・・・うそでしょ？

それって勝敗が決まっているじゃない・・・
こちらの勝ちで・・・

「いつからだ？」

「明日か明後日ぐらいにでも行ってください・・・では・・・

明日か明後日・・・

それで・・・50人の命が消えるの？

銃弾と接触（前書き）

今回は、
神宮亮視点です

今から行くか

俺は用意された部屋に荷物を置いて、臘月に用を済ませてへくると言
い出かけた

もちろん、村にだ

俺の速さなら、30分もかからない

【村】

「おい！…だれかいるか！…？」

「だれだ？」

「…！」

大樹！？なんでこんなとこいんだよ
いや、いまは好都合か？

「何しに来た？」

威嚇しながら俺に聞いてくる

「戦う意思はない、聞くだけ聞け」

「ここに飛ばしたのおまえだろ…」

「明日か明後日にここに魔物が攻めてくる…ここに村人に伝え
ろ。ここを離れろって」

大樹が少し驚いたような顔をして、また聞いてくる

「一つ聞くが…本当に戦う意思はないんだな？」

「ああ、俺はいらない殺しはしない」

「ついてきてくれ…」

俺は大樹に後について行つた

そこは村の中心に建てられた家だ

結構デカい

「あ、だれだつ…！」

「安心してくれ、こいつは情報を持つてきた」

「情報？」

村の娘みたいなのが首をかしげる

「明日か明後日ぐらいに1000もの魔物が攻めてくる……だから、その前に逃げてくれ」

「1000！？！」

「うそ……」

まあ、驚くだらうな……あれ？何で……

「え？……どうして、逃げる準備をしないんだ？」

「……無理なんだよ、ここから逃げるのは……」

大樹がつらそうな顔をして言い返す

「どういう……あ！！」

よく、見ると村娘と村人……ほかの人たちも尻尾が生えていたりする

まさか……

「ここ以外、行く場所がないのか……」

「ああ、人間の世界に行く道はあるが入れるのが一日3人まで……」

「……ついでに、今日はもう3人入つて行きました……」

「マジかよ……」

俺の次元転送弾はどこ行くかわからない
下手をすると溶岩の中などに入る

俺と大樹でももう一人守るので精いっぱいになるだろう

50人近いのを守りながら戦うのは無理だ

しかも、俺は立場上はあっち……敵側だ

万事休す……いや、まだ方法はあるが……大樹が乗ってくれるか

「亮、だつたよな？あんたの名前……」

「ああ

「話があるからついてきてくれないか？」

「わかつた」

俺達は家を出た

刃と魔力通信（前書き）

今回は千歳大樹視点です

「なんでお前は敵側なんだ?」
外に連れ出して今、俺が一番気になることを聞いた
亮は強い、そして、なぜか俺達を助けようとする・・・
なぜだ?

「・・・俺の嫁、皐月のこと覚えているか?」

「一緒にいたやつだつたな・・・」

「皐月が神になつた理由は知らねえけど、多分俺を制御するために
神にされたんだ」

「どういうことだ?」

「ちょっと理解ができない

「お前なら一番大切なものを人質に取られたらどうする?・・・俺
は言いなりになつてている」

「!-!-」

「そうか・・・亮の力が欲しいためか

「多分、俺が女神などを殺そつとすると皐月は死ぬ・・・」
そ終わりだらう

「終わり?」

「・・・あいつは罪があるんだ・・・自殺つて書いつ

「・・・そう言えば、亮はゾンビだつたよな・・・なんで死んだん
だ?」

「病死、これは仕方ないが皐月は俺が死んだあと、すぐに死んだら
しい」

「それでか・・・」

自殺する気持ちはわかる・・・俺の真奈が死んだらその考えが浮か
ぶだらう

「この情報は上の位の神に聞いたからあつていいだらう」

「わかつた・・・亮を仲間にしようとするのはあきらめ・・・」

「別にいいぞ？お前の仲間で」

「え？」

何言つてるんだ？亮は・・・

敵同士だから仲間にはなれないんじゃ

「お前できるよな？魔力通信」

「できるけど・・・」

魔力通信・・・自分の魔力を使い会話をすることだ
ついでに会話をしたい相手の魔力番号を記憶していくないとできない
そのせいで俺は一度もかかつてきたことがない

魔力番号は魔力が高いほど、番号がおおくなるから

「俺達ぐらいの魔力なら盗聴される心配はない・・・これが俺の魔
力通信番号あとでかけてくれ」

小さな紙を手渡してきた

「おい」

「そろそろ、時間だから帰るは

そう言って立ち去つた

俺の魔力番号は3万ケタ

亮は・・・3万ケタ

お互い苦労するな

人に教えるとき

ほろりと涙が出た気がした

て言つた俺・・・今からこれ覚えないといけないんだな

神と裏切り（前書き）

今回は神宮^{かみや}月^{つき}視点^{しどん}です

神と裏切り

【夜】

びりじょう

・・・ 村人を殺さないといけないのに・・・

殺したくない

でも、でも・・・

・・・ こういう時は亮に相談した方がいいわよね・・・

「起きているか？ 皇月？」

「亮！？」

「ちょっと、話したいことがあってな・・・

「なに？ なに！？」

私は興奮している、こんなこと死んでから初めてだからだ
いや、生きているときもそんなになかつた
亮は基本的には一人で何とかしているからだ

「もし、俺が女神を裏切つたらだ・・・」

「え？」

裏切つたら？

何を言つてるの？ 亮・・・

「俺が女神を裏切つたりしたらお前はどうする？」

「どうしようもないよ・・・ 私の命は女神が持つてる・・・ すぐには

殺されるに決まってる・・・」

「殺されるに決まってるか・・・ わかつた聞いたかったのはそれだけだ・・・ 寝たほうがいいぞ？」

「うん・・・」

なんで亮は聞きに来たんだらう

でも、裏切るかあ

もし、私の命が私の命だったら・・・ そうしてただろうな

そして、私は眠りについた

巫女と氣持ち（前書き）

今回は、ひこうまな 杉真奈視点です

巫女と気持ち

【朝】

大君は1000の軍隊に立ち向かうといった理由はわからないけど、大丈夫らしいあの亮つて人もいつの間にかいないいつ攻めてくるかもわからないけど、大君はぐつすりと寝ているなんだろう

でも、久しぶりに見たかな？

大君がこんなにも寝てるなんて・・・

「あれ？ まだ大樹起きてないのか？」

敵！？

「！！！！フレイム・・・」

私は魔法を唱えようとししかし・・・

「ストップストップ、寝込みとか襲わねえよ俺は」

「・・・」

警戒は解けない

この人は大君と同じぐらいの力を持つている

襲われたらどうしようもないけど、でも少しごらいうら時間を稼げる

「あ、ついでに今日は攻めて来ないぞ？」

「そう・・・なら大君は起こさないであげて・・・」

「確かに、だいぶ魔力が減つていたな」

「やっぱり、あなたはわかるんだ。大君の魔力」

「こればっかりは生まれてからだからな・・・」

生まれてからか・・・いいなあ。私も大君と同じ力があれば

「・・・私つてお荷物だと思う？ 客観的から見て・・・」

聞いてみた・・・

同じぐらいの魔力の持ち主なら今の私がどんな風に見えているか気

になつたからだ

「・・・お荷物ではないだらうな・・・」

「どうして！？」

私の予想した答えと違うのが帰つてきた
「こいつを見てたらわかるよ・・・こいつがお前のこと好きだつて
ことがな」

「へ？ へ？」

どういうこと？

大君が私のこと好き？

そんなことあるわけ・・・

「考えてみろよ、最初に戦つた時こいつはビリコの風に戦つっていた
？」

「盾を構えて・・・」

自分の身も盾にしていた・・・

「ああ、お前に怪我がないようにな」

「え？ それがどうか・・・」

「はつきり言つや？ あの戦いお前を守らなければ激戦になつてた」

「激戦？」

十分、激戦だつたと思つけどな・・・

「多分、あの場所を中心に焼け野原ができただらうな」

「うそ・・・」

「でも、こいつは戦わなかつた・・・ビリからビリ見てもお前を守
るためにだ」

「・・・」

「わかつたか？ これで・・・こいつはおまえのことが・・・」

「ストップ！？」

大君が急に起きた

「わー！」

私はびっくりして、声を上げた

「お、起きたか」

大君と同じ魔力を持つて いる人はのんきな声で答えていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1611z/>

千の刃と千の銃弾

2011年12月20日22時55分発行